

～すぎなみコミュニティカレッジ～

- 実践に学ぶ！ - 指導者と共に青少年スポーツの未来像を考えよう

主催：杉並区教育委員会

企画・運営：NPO法人 スクール・アドバイス・ネットワーク

協力：杉並区学校教育コーディネーター

報告者：NPO法人 生涯学習 知の市庭

講演 2 「青少年スポーツの原点」

講師：山木 健司氏 スポーツプログラマー

最初に、私が外部指導者となったいきさつからお話します。

私は、スポーツ行政の仕事をしていますが、息子が中学生になってバスケットボール部を希望し、バスケットボールをやり始めたのがきっかけです。

最初は試合があると観戦に出かけて、息子の先輩たちの試合を応援していましたが、顧問の先生と多少知り合いだったので、息子が2年生のときからクラブに関係するようになりました。息子が中学を卒業した後も、クラブに残って手伝うようになり、指導者としては、もう10年近くクラブに関わっております。

長年クラブに関わっていると気がつくことがあります。昔は、練習のやり方が危険だと感じる指導者もいました。また、顧問の先生が生徒を大声で怒鳴ってばかりいるのを見て、学校の先生なのにどうしてこんなに怒ってばかりいるのかなと感じたこともあります。最近は、だいぶ改善されたのか、昔のように怒鳴ってばかりいる先生も少なくなってきたような気がします。

まず、クラブの中で外部指導者としてどのように関わっているかですが、クラブの中では、トレーナー的な役割を中心に考えて活動しています。

顧問との関係では、私のところは、顧問がバスケットボールを専門に指導できる先生なので、私はウォーミングアップや初心者の対応を中心に、トレーニングの専門家の立場で役割を分担するようにし、部員のからだづくり、動きづくりの部分を受け持つようにしております。また、指導者のレベルアップが子どものスポーツ活動の向上にもつながると考えておりますので、顧問にもトレーニング等の最新情報を伝え、スポーツ指導の在り方や、子どものからだづくりや、トレーニング法などをアドバイスしたりすることもあります。

子どもたちに対する役割は、ひとつは、子どもたちの健康管理です。部員たちに対して、一番心がけているのは、からだのことは責任をもって相談に乗るから何かあったら相談するようにということです。

昔は、どこか悪いとか痛いところがあっても、子どもたちは、隠していることがありました。それは、スタメンから外されたり、試合に出られなくなるのを恐れていたということもありました。でも、最近は、安心して、どこが悪いとか痛いとか、積極的に言ってくるようになりました。部員から痛いところを見て欲しいと申し出があったら、チェックして、マッサージをしたり、自分でス

トレッチやマッサージのやり方を伝えたり、日ごろから自分のからだをどのように管理するかを指導しています。もちろん、素人判断は禁物ですから、症状がひどい場合などには、保護者に連絡し、医者に行くよう連絡するようにしています。

もうひとつは、チームから落ちこぼれそうな子どもや理解が遅い部員の個別の対応なども、私の役割として考えています。また、顧問の先生には言えないことも私には言えるといった場合もありますから、私が子どもから相談を受けて、それを顧問の先生に伝えるといった橋渡し役も担ってきました。部員との関係は、「みんなとは、先生でも、親でもない、ひとりの大人としての関係だよ。」と言っています。従って、「先生」や「コーチ」とは言わせないようにします。「やまきさん」と名前を言わせています。学校の先生でもない、バスケットボールを教えるコーチでもない、一人の大人として接するようにしています。

また、指導者としては、保護者との関係もあります。長く関係していますので、今の部員のお兄ちゃんやお姉ちゃんの時代からつながっている保護者もいます。そのような保護者からは、学校のことや顧問に関する相談なども受けることがあります。なかなか難しい問題もありますが、どちらの立場に立つということではなく、相談を受けた私自身の立場で必要なアドバイスをするようにしています。

外部指導者として部活動を見てきた立場で、最近感じることをお話しします。中学校の部活動は、あくまでも、学校生活の一部という思いをもっています。バスケットボールを見ていますが、バスケットボールも、スポーツではありませんが、あくまでもエドゥケーショナル・バスケットボールで、教育の一環として、子どもたちにとっては、学校生活の一部としてとらえるのがよいと思っています。授業があり、生徒会活動があり、学校の行事があり、クラス内でのつきあいもあり、その中の一部としてクラブ活動があるということです。従って、クラブ内での問題児は、顧問や他の先生に聞いても学校生活でも問題児のようで、そのような子は、学校の中では、顧問、担任等一体となっかけていますが、私もなるべく学校での情報をもらうように心がけています。授業態度、クラスでの仲間との関係、先輩や後輩とのつながりなど、バスケットボールとは関係のない部分の情報も含めて部員としてみるようにしています。

最近もそのような子どもたちがいました。その子たちは、ミニバスケットボールの経験があり、ミニバスの時代にうまいと言われていた子どもたちでした。学校生活も大変なようでしたが、部活動でも、アメリカのプロバスケのマネをしているわけではないのですが、彼らのバスケットボールのイメージは、「かっこよく自分でドリブルしてシュート！！」。従って、ディフェンスの練習は嫌い。チームプレーは覚えなし。あまりディフェンスが強くないミニバスの世界では通用するかもしれませんが、中学生のディフェンスも強くチームプレーが重視されるバスケットボールの世界では通用しません。ディフェンスに

抑えられて上手くいかないといふてくされる。部員でいた3年間、バスケットは個人プレーではなく、5人でやるチームプレーなのだと言いつけましたが、結局、通じなかった部員もいました。このような子も、ひょっとしたら、地域のスポーツクラブであれば、バスケットボールがうまいということで花形プレーヤーとして扱われるのかなと思います。

一人一人の子どもたちの成長のための教育活動の一つと見るか、スポーツクラブの一員として技術のある子を育てるというスポーツ活動と見るかで、評価が変わるのではないかという気がしています。私が、単純に、「子どもの面倒は地域でみればよい」という考え方に納得できないのは、そんなことがあるからです。

最後に、この問題とも関係することですが、「子どもにとってスポーツとは何か」という話をさせていただきたいと思います。

私は、スポーツというのは、次の二つのことが基本だと思っています。スポーツとは、子どものスポーツに限らず、“I'm OK and You're OK” - -これがスポーツの基本精神だと考えています。そして、子どもたちにスポーツをさせる、スポーツを指導するのは、このことを伝えていくことだと考えています。

つまり、スポーツは、「わたしもOK、あなたもOK。お互いにOKしたルールを守り、目的に向かって全力を尽くしてプレーする身体活動」です。スポーツでは、ルールを守って全力を尽くすことが大切なことであり、ルールを守ってプレーをしている限りペナルティはない。しかし、ルールを守らないとペナルティがある。という「社会生活の基本を身につける」活動であるということです。ですから、子どもたちは、スポーツを通して、社会生活の基本を身につけることができると思います。さらに、「目的をもって全力をつくす」という「生き方の基本」も身につけることができるのではないかと、私はそのように考えています。

最近、子どもたちの世界では、全力で何かをやるのがダサイという風潮があります。だからこそ、顔を真っ赤にし、頭の中を真っ白にして行うスポーツには、大きな意義と意味があると思うのです。

また、“I'm OK and You're OK” がとても重要だと思うのは、日本のスポーツ界では、強い人がエライ人という風潮があり、その人の言うことがまかり通るということがあります。子どもたちの世界でも、うまい子がまわりに対して大きな顔していることがあります。

これは、“I'm OK” であっても、“You're OK” ではありません。相手の立場を認めるには“ I'm OK and You're OK ”という態度が必要です。

スポーツを通して、子どもたちが人と人とのコミュニケーションの基本を身につけるためにも、ここは強調したいところです。また、ラグビーの世界でよく言われる言葉に“ One for All, All for One ”というものがあります。

子どもたちには、「仲間がいなければ、自分が好きなバスケをやりたくてもできない。好きなバスケを続けたければ、仲間を大事にしろ！」と言っている

す。

スポーツでは、相手チームがいなければゲームは成り立たない。自分を大切にすると共に、活動を共にする仲間、また、活動に関係するすべての人を大切にするという、「人とのつながりの基本、組織人としての基本」も身につけることができます。スポーツは、子どもの体力向上に寄与する、青少年の健全育成に大切とよく言われます。しかし、一般に言われる健全育成などという抽象的なものではない、もっととても大切なものがあると思っています。

スポーツは、非日常のプレイの世界における活動を通して、社会人（おとな）として必要なことをいろいろ身につけていく大切な場であり、特に、パソコンゲームというバーチャルな世界で、孤立して楽しんでいる今の子どもたちにとって、絶対に必要なものと思っています。スポーツの指導に当たる者としては、技術的な指導に偏ることなく、こういったスポーツのもつ特性なども伝えてゆきたいと考えています。